

平和運動の発展

クリスチャニアのシュトルティング⁽¹⁾にあるノーベル委員会⁽²⁾で
1906年4月8日に行われたベルタ・フォン・ズットナーの講演

訳：糸井川 修・中村 実生

永遠の真実の数々、それに永遠の権利の数々は、常に人間の認識の天空に輝いていました。しかし、それらが地上に引き降ろされ、形を与えられ、生命を吹き込まれ、行動に移される過程は、まことに遅々としたものでした。

そのような真実の一つが、平和は幸福の基盤であり幸福の最終目的であるという真実、そのような権利の一つが、自分自身の生命に対する権利です。あらゆる本能の中で最も強い本能、すなわち自己保存の本能が、いわばこの権利の正しさを証明しています。そしてこの本能を認めることは、「汝、殺すことなかれ」という太古の戒律によって正当化されています。

しかしながら現時点の人間の文化において、いかにその権利が尊重されず、その戒律が守られていないか、それは私が申し上げるまでもありません。平和の可能性の否定、生命の軽視、そして殺人の強要の上に、今日に至るまで、軍事的に組織された社会秩序の全体が築かれています。

そして、現在もそうであり、いわゆる私たちの世界史——ああ、かくも短い二、三千年が何だというのでしょうか？——を遡る限り過去もそうであったがゆえに、かなりの人々、ほとんどの人々が、世界は常にそうであり続けるにちがいない、と信じています。世界は永遠に変化と発展

を続けるという認識は、まだほとんど広がっていません。なぜなら、あらゆる生命——地質学的なもの、社会的なもの——を支配する進化の法則の発見も、発展する科学がもたらした最近の成果だからです。

そうなのです、過去のもの、現在のものが永遠にあり続けるという信念は、誤った信念です。存在したものの、存在するものは、時の流れから見れば岸辺の景色のように背後へと過ぎ去ってゆきます。人類という荷を積み、その流れに運ばれる船は、生まれくるものの新しい岸に向けて絶えまなく流れてゆくのです。

生成するもの、達成されたものは、存在したものの、乗り越えられたものよりも常に一段とより良く、より高く、より幸福になるということ、それが進化の法則を認識した人々、またその法則の実現に自らも力を貸そうと努力する人々の確信です。物理的領域においても、道徳的領域においても、自然の法則と自然の力を認識し、意識的に利用することによって初めて、私たちの人生を楽に、豊かに、高貴にする技術的発明と社会的整備がなされるのです。これらがまだ理念の領域を漂っている間は理想と呼ばれ、それが目に見える生きた影響力のある形を取るやいなや、進歩の達成となるのです。

* * *

「もしもあなたが私に最新の情報を提供して下さり、平和運動が現実的活動を始めていることが分かれば、私は経済的な方法で更なる援助をいたしましょう」

これは、こうして私が皆様方の前に登壇する栄を授かったことの恩人、高貴な北国人アルフレッド・ノーベルが、1892年にベルンで私に語った言葉です。平和会議が開催されたその地で、彼と私たち夫婦が顔を合(3)わせたときのことでした。

アルフレッド・ノーベルは、この運動がもっともらしい空論の雲間から、達成可能で、現実的に確定された目標という領域へと移行したことを次第に確信し、それを彼は遺言の中で証^{あか}しました。文化の促進に役立つと認識していたその他のもの、すなわち科学と理想主義的な文学の隣に、彼はまた平和会議の目標、すなわち国際的司法の確立とそれに続く軍備の削減をつけ加えたのです。

社会の変革は、ただゆっくりと、時として間接的な道を経てのみ成し遂げられる、とノーベルも考えていました。彼は、アンドレーの北極探検に8万フランを寄付したことがありました。彼は私に宛てた手紙の中で、あなたの考えている以上にそれは平和に役立つ可能性がある、と書いていました。

「もしもアンドレーが目的を達成すれば、たとえ志半ばの達成であったとしても、それは精神を揺り動かし、新しい理念と新しい改革の発生と受容をもたらす、あの騒ぎと興奮を引き起こす成功となるでしょう」

しかしまた、より近く、より直接的な道も、ノーベルは視野に入れていました。彼は別の機会に、私への手紙に次のように書きました。⁽⁵⁾

「あらゆる国家が連帯して、最初に他国を攻撃した国家を攻撃する義務を負う、という結論にまもなく至るかもしれませんし、そうなるべきでしょう。そうすれば戦争は不可能となり、極めて残酷で非理性的な国家でさえも仲裁裁判所に向かうか、冷静を保つよう強制されるに違いありません。もしも三国同盟が、三国のかわりにすべての国家を包括したならば、平和は数百年にわたって保障されるでしょう」

アルフレッド・ノーベルは、平和の理念が生きた組織、すなわち機能する制度に至るような大きな進歩と決定的な出来事を見ることなく、この世を去りました。

しかしながら彼は、1894年にイギリスの偉大な政治家グラッドストーンが提案した、仲裁裁判という原理よりも踏み込んだ常設の国際裁判⁽⁶⁾

所の設置について、知ることができました。この偉大な老イギリス人の友であるフィリップ・スタンホープ⁽⁷⁾は、1894年の列国議会同盟の会議にグラッドストーンの名においてこの提案を伝え、こうした裁判所の計画を諸政府に知らせることに成功しました。アルフレッド・ノーベルも、その内容を知りました。しかし、その後の結果はというと、ハーグ平和会議の招聘と同地での常設仲裁裁判所の創設⁽⁹⁾が実現に至ったのは、ようやく彼の死後のことでした。アルフレッド・ノーベル、モーリッツ・フォン・エギデイ⁽¹⁰⁾、ヨーハン・フォン・ブロッホ⁽¹¹⁾といった支援者の早すぎる死は、この運動の現在と未来にとって計り知れない損失です！ 彼らの仕事と活動はその死を越えて働きかけを続けていますが、もしも彼らが私たちの許に生きていたならば、彼ら一人ひとりの及ぼす影響力は、この運動のいっそうの促進にどれほど貢献したことでしょうか。揺らぎつつある古い体制を守ろうと、今まさに軍国主義の側から挑まれたこの戦いを、彼らはどれほど勇敢に受けて立ったのでしょうか。

戦いを挑んでも無駄です。ひとたび新しい体制が組織化され始めれば、古い体制は消え去るしかありません。諸国民の間の平和状態を法的に保障する可能性、必要性、そしてこの豊かな恵みについての確信は、すでにあらゆる階層に、そして権力者の層にも十二分に浸透しており、その課題はすでにはっきりと提示され、すでに多くの人がそれに従事しているゆえに、遅かれ早かれ達成されることになるでしょう。今日、平和運動の理想を公然と支持する国家元首はすでに多数います。数年前、その陣列にはまだ一人の大臣すらいませんでした。権力の座にある政治家で、最初に列国議会同盟の会議への賛同を正式に伝えてきたと私が記憶しているのは、ノルウェーの首相ステーン⁽¹²⁾でした。この知らせ——それは当時注目を集めました——を1891年にローマで開催中であった列国議会同盟の会議に届けてくれたのは、ジョン・ルント⁽¹³⁾でした。ノルウェー政府は、列国議会同盟の議員に対する旅費の支給と、ベルンの平和ビュー

ローに対する補助金の支出を認可した、最初の政府でした。アルフレッド・ノーベルには、自分が平和のために残した遺産の管理を他ならぬシュトルティングに委ねた理由が、十分にあったのです。

* * *

ここで少しばかり世界を見渡してみましょう。様々な事件や観点は、本当に平和主義の現実的成果と止まることのない発展について語る根拠となっているのでしょうか。世界の歴史が未だ経験したことの無い恐ろしい戦争が極東で荒れ狂ったばかりですが、そこに巨大なロシア帝国を激しく揺るがし、その結末がまったく予測できない、さらに恐ろしい革命⁽¹⁴⁾が結びついています。それは、火災、略奪、爆撃、処刑、溢れかえる牢獄、鞭打ち、大量虐殺にほかならず、要するに悪魔の振るう暴力の狂宴です。一方、中央ヨーロッパと西ヨーロッパでは、克服しがたい戦争の危機、不信、威嚇、サーベルの響き、新聞による扇動があり、熱に浮かされたように至る所で戦艦の建造と軍備が進められています。イギリス、ドイツ、フランスで発表される小説では、隣国からの将来の攻撃は完全に自明な切迫したこととして描かれ、そうすることでいっそう急激な軍備増強がけしかけられています。要塞が建設され、潜水艦が建造され、すべての道に地雷が敷き詰められ、戦闘能力のある飛行船が試作されていますが、やがて始まる戦争が極めて避けがたい最重要の国家的事件であるかのような熱心さです。しかも第二回ハーグ平和会議⁽¹⁵⁾には、それを戦争の会議へと貶めるプログラム^{おとし}が用意されています。それでも人々は、平和運動は前進していると主張するつもりでしょうか？……

観察しなければならないのは、表面上広がって目立っているものばかりではありません。地面から芽生えるものを見る術も、身に付けねばなりません。二つの世界観が、そして文明の二つの段階が今互いに争って

いることを、知らなければならぬのです。そうすれば、崩れ去ろうとしながら威嚇し続ける古いものの真下から、未来ある新しいものが生まれ出ようともがいていることに気づくでしょう。それは、もはや決して離れ離れではなく、もはや決して弱いものでも、形の無いものでもなく、すでに^{あまね}遍く行き渡り、精気に溢れています。平和運動そのものとはまったく関係なく世界の国際化と連帯の過程が進行していますが、それはこの平和運動が、起こりつつある変化の原因というよりも兆候の一つだからです。この進行を後押ししているのは、技術発明、交通の発達、利益共同体の細分化と国際的な広がり、経済的な相互依存です。そして——そもそも本能とはそういうものなのですが——半ば無意識に、そこでは人間社会に備わる自己保存本能が働いています。破壊の手段が果てしなく増強され続けていく中、人間社会は破滅に向かいながら、それでも本能はそれに^{あらが}抗っているのです。

戦争のない時代を準備する、この無意識の原動力の傍らには、十全な目的意識を持った人々がいます。彼らは、すでに活動計画全体の明確な見取り図を描き、掲げられた目標を可能な限り早く達成する方法を心得ていて、それを用い始めています。現在のイギリスの首相キャンベル＝⁽¹⁷⁾バナーマンは、改めて軍縮の問題を提起しました。フランスの元老院議員エストゥールネル⁽¹⁸⁾は、独仏協商を軌道に乗せようとしています。ジョレス⁽¹⁹⁾という人物は、すべての国の社会主義者に、結束して戦争に抵抗するよう促しています。あるロシアの学者（ノヴィコフ⁽²⁰⁾）は世界の大国が手を結ぶ七カ国同盟を求めています。ルーズベルト⁽²¹⁾という人物は、すべての国家に仲裁裁判条約を提案し、彼の教書の中で次の言葉を語っています。

「あらゆる可能な方法を用いて、もはや武力が諸国民の間の仲裁人とならないような時代を引き寄せることが、政府に課せられた義務であります⁽²²⁾」

* * *

アメリカについて、少し話を続けたいと思います。この無限の可能性を秘めた国が傑出しているのは、果敢な精神によって、最も偉大で最も新しい計画を立案し、それを実行するために最も容易で最短な方法を見出すことができるからです。言い換えるなら、思考においては理想を求め、行動においては実効性を求めているということです。現代の平和運動は——私たちがそれを期待しているように——アメリカから力強い刺激と実現のための明解な公式を得るでしょう。今しがた引用した大統領の言葉に表れているのは、この課題についての完全な理解であり、現在アメリカで進められている平和キャンペーンのプログラムに用いられている次の命題には、その方法が明確に示されています。

1. 仲裁裁判条約
2. 国家間の平和同盟
3. 正義を諸国民の間に行使する権限を備えた国際機関。この正義は私たちの（北アメリカの）諸国家間で行使され、戦争に頼る必然性を排除している。

1904年10月17日、ルーズベルト大統領がホワイトハウスに私を迎えたとき、彼は次のように言いました。「平和は近づいています、確実に近づいています、しかし、ただ一歩ずつしか近づいてきません」

そして、現実もその通りです。ある目標が、どれほど明確に認識され、どれほど近くにあるように見え、容易に達成できるかのように合図を送ってきても、そこに至る道はただ一歩ずつしか進むことはできませんし、そこでは数え切れない障害を乗り越えねばなりません。

さらに、ここで問題となっている目標は、幾百万の人々が未だ^{いま}まった

く見たこともなく、無数の人間がそれについて何も知らないか、あるいはそれをユートピアとしか見なしていないものなのです。大方の関心は、それが達成されないこと、すべてが古いままに留まり続けることとも結びついています。そして古いもの、既存のものを信奉する人たちには、慣性という自然法則、つまり変わらずにいようとする力という実に強力な盟友がいます。この盟友はあらゆるものに、いわば消滅に抗う守りとして、内在しています。それゆえ、これから平和主義を待ち構えているのは、決して容易な闘いではありません。私たちの激動の時代を満たしているすべての闘いと問題のなかで、国家同士を暴力の状態に置くのか、法の状態に置くのかという問題が、おそらく最も重大で容易ならぬものです。なぜなら、世界平和が保障されてもたらされる、幸福で祝福に満ちた結果が予測できないのと同様に、今なお差し迫る、理性を失った少なからぬ人々の待ち望む世界戦争がもたらす結果も、予測できないほど恐ろしいからです。平和主義の信奉者は、自分たち一人ひとりの及ぼす影響力が些細なものであることを自覚し、数の上でも、名声でも、自分たちがまだいかに心もとないかを^{わかま}弁えています。しかし彼らは、自分自身のことは謙虚に考えても、自分たちが奉仕している事柄について謙虚に考えてはいません。その事柄は、そもそも奉仕しうる、最も偉大な事柄であると思っています。私たちのヨーロッパがなおも破滅と崩壊の舞台となるのかどうか、あるいは、この危機を防ぎ、いち早く法によって平和が保障された時代をもたらし、そこで文明が想像もつかないほどの繁栄へと発展するのかどうか、また、それがどのようにして可能なのかは、この事柄の解決如何にかかっています。付随する多面的な観点とともに第二回ハーグ平和会議のプログラムを本来飾るべきなのはこの問題であり、すでに提案がなされている、海戦の法および慣行、港や都市、村落からの砲撃、地雷の敷設等々についての討議ではないのです。このプログラムによって明るみに出ているのは、世界を支配している戦争と

いう構造を信奉する人たちは、まさに平和運動のための場所であるはずの会議において、なおも海戦の法や慣行に修正を施そうとしています、その真意は戦争の維持にある、ということです。しかしながら平和運動の信奉者たちは、自分たちの目標を守り、また一歩それに近づくために、会議の中と外で持ち場につくでしょう。その目標とは、ルーズベルトの言葉をもう一度借りれば、彼の政府の義務であり、すべての政府の義務なのです。すなわち、

「諸国民の間の仲裁人が、もはや暴力ではなくなる時代をもたらすことです」

注

- (1) クリスタニアはノルウェーの首都オスロの旧名、シュトルティングはノルウェー議会のこと。
- (2) 1905年、ズットナーは女性として初めてノーベル平和賞を受賞した。受賞の知らせは12月に本人に伝えられたが、このとき彼女はドイツ各地を講演で回っていたため、受賞講演は翌年に延期された。講演はハルス兄弟コンサートホールで、多くの聴衆を前にして行われた。講演翌日のオスロの新聞『アフテンポステン』によれば、彼女はこのとき黒い衣装に身を包み、感情のこもったハスキーな声で、最初から聴衆を魅了した。彼女の語りは簡潔で、不自然なアピールも、身振り手振りもなく、表情に変化はなかった。
- (3) 第4回平和会議は、1892年8月22日～27日にベルンで開催された。会議の終了後、ノーベルはズットナー夫妻をチューリヒに招待したが、それはズットナーとノーベルの最後の出会いとなった。このときの様子については、ズットナーの『回想録』に記述がある (Bertha von Suttner: Lebenserinnerungen. hg. und bearbeitet von Fritz Böttiger. Berlin, DDR, 1968. S.300ff.)。また、そのあらましについては、糸井川修「ベルタ・フォン・ズットナーとアルフレッド・ノーベル—ズットナーの『回想録』を中心に—」(愛知学院大学『語研紀要』第32巻第1号、2007年1月、147-171頁) 参照。
- (4) Salomon August Andrée (1854-1897)：スウェーデンの航空技師、探検家。

- 1897年、気球による北極探検の最中に消息を絶った。
- (5) 1893年1月7日付の手紙。Bertha von Suttner: *Lebenserinnerungen*. S.303.
- (6) William Ewart Gladstone (1808–1898)：イギリスの首相（1868–1874、1880–1885、1886、1892–1894）。
- (7) Philip James Stanhope (1847–1923)：イギリスの政治家（下院議員、上院議員）。1890年と1906年に列国議会同盟の会議の議長を務める。
- (8) 列国議会同盟 *Interparlamentarische Union* (IPU) は、国際的協調と平和を目指して1889年に設立された各国の国会議員による組織。各国の平和協会の代表が集う世界平和会議 *Weltfriedenskongress* とともに、第一次世界大戦以前の国際的な平和運動の中心的役割を担った。
- (9) 26カ国の代表が参加して開催された第一回ハーグ平和会議（1899年）において、常設仲裁裁判所の創設が決定した。ズットナーはこのとき新聞『デイ・ヴェルト』*Die Welt* の特派員としてハーグを訪れ、現地でサロンを開いて平和運動への理解を広げるとともに、『ハーグ平和会議、日報』*Die Haagerfriedenskonferenz, Tagebuchblätter* (1900) を発行した。
- (10) Christoph Moritz von Egidy (1847–1898)：プロイセンとザクセンの将校、作家。教会のドグマに疑問を呈した著作『真面目な思考』*Ernste Gedanken* (1890) が原因となって軍役を退く。
- (11) Johann von Bloch (1836–1902)：ポーランド生まれの事業家、作家。『技術的、経済的、政治的関係における未来の戦争』*Die Zukunft des Krieges in seiner technischen, volkswirtschaftlichen und politischen Bedeutung* (1899) を著し、近代戦争は将来不可能になることを示唆した。
- (12) Johannes Wilhelm Christian Steen (1827–1906)：長年に渡ってノルウェーの国会議員を務める。首相（1891–1893、1898–1902）、ノルウェー・ノーベル委員会委員（1897–1904）。
- (13) John Theodor Lund (1842–1913)：ノルウェーの国会議員、ノルウェー・ノーベル委員会委員（1897–1913）。
- (14) 日露戦争（1904–1905）のこと。
- (15) 1905年1月に始まった第一次ロシア革命のこと。ツァーの独裁政治に対する不満は、日露戦争をきっかけにして一連のストライキや暴動、暗殺を引き起こし、市民は自由と立法議会の開設を要求した。ズットナーが講演を行った頃も、革命の空気はまだ色濃かった。
- (16) 第二回ハーグ平和会議は、ズットナーがこの講演を行った翌年、1907年に開催された。
- (17) Sir Henry Campbell-Bannerman (1836–1908)：イギリスのリベラル派の政

治家で、1905年から1908年に首相を務めた。

- (18) Baron Paul Henri Benjamin Balluet d'Estournelles de Constant de Rebecque (1852–1924)：フランスの外交官、政治家。1909年にノーベル平和賞を受賞。
- (19) Jean Léon Jaulès (1859–1914)：フランスの政治家、社会主義者。第一次世界大戦に反対して、熱狂的な愛国主義者に暗殺された。フランスの新聞『ユマニテ』*L'Humanité*の創刊者、編集者。
- (20) Yakov Aleksandrovich Novikov (1849–1912)：ロシアの社会主義者、作家、『ヨーロッパ連邦』*La Fédération de l'Europe* (1901)の著者。
- (21) Theodor Roosevelt (1858–1919)：アメリカの政治家、第26代大統領（1901–1909）。
- (22) ルーズベルト大統領の1905年12月5日の合衆国議会への第五回教書。

テキスト

Bertha von Suttner: Die Entwicklung der Friedensbewegung. In: Les Prix Nobel en 1905, Stockholm 1907.

注の作成にあたっては、以下のノーベル財団のホームページに掲載されている本講演の注を参考にした。

http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/peace/laureates/1905/suttner-lecture.html

(この注は *Nobel Lectures, Peace 1901–1925*, Editor Frederick W. Habermann, Elsevier Publishing Company, Amsterdam, 1972に基づいている)

